

平成 29 年度研修会開催報告（詳細は会報誌「日中建協 NEWS」228 号（2017 年 7・8 月号）に掲載）

日時：2017 年 5 月 12 日（金）～13 日（土）

場所：愛媛県新居浜市「住友グループ 別子銅山記念館、広瀬歴史記念館」、「マイントピア別子」

参加人数：15 社、22 名

今年の研修会は、2 年ぶりに 1 泊 2 日で開催いたしました。

1 日目は、愛媛県喜多郡内子町にある八日市・護国の町並みを見学しました。2 日目は、新居浜市にある住友グループの施設「別子銅山記念館」と別子銅山の施設跡などを利用したテーマパーク「マイントピア別子」を見学後、同じく住友グループの「広瀬歴史記念館」を見学しました。

研修会の目的は、今後中国へも展開される会員企業の最先端技術やその取り組みを視察することにあります。今回は住友林業様、住友グループの原点ともいえる施設と歴史を見学し、現在の発展と未来への広がりをお伝えいたしました。

<1 日目>八日市・護国の町並み



内子町は、愛媛県のほぼ中央に位置する人口約 1 万 6 千人位の山間の町で、江戸時代後期から明治時代にかけて木蠟の生産によって栄えました。

内子町にある八日市・護国地区は、昭和 27 年に国の重要な伝統的建造物群保存地区に選定されています。約 600m の通りに約 90 棟の伝統的な民家や豪商のお屋敷が建ち並び、当時の面影をそのまま残しています。

本芳我家住宅



本芳我家は、芳我一族の本家。明治 22 年に建てられ、国の重要文化財に指定されています。

上の方を見ると、屋根の妻に「懸魚（げぎょ）」という棟木や桁の木口を隠すための装飾が取り付けられていたり、「鏝絵（こてえ）」という漆喰の彫刻が飾られています。

海鼠壁も菱形ではなく亀甲形で、出格子に細かい細工が施されていたり、瓦に家紋が入っているなど手が込んでおり、内子の中でも際立った豪華な造りになっています。

道後温泉

八日市・護国の町並みを見学後、道後温泉に立ち寄りしました。道後温泉は 3000 年の歴史を持ち、日本最古の温泉ともいわれ、本館は国の重要文化財に指定されています。本館 3 階の屋上に設置されている「振鷲閣（しんろかく）」には太鼓がつり下げられていて、昔から時刻を告げる「刻太鼓」として 1 時間毎に打ち鳴らされていましたが、現在は、朝・昼・夕の 3 回だけ鳴らされています。来年以降、大規模な改修工事に入るため、改修前の貴重な時期に訪れることが出来ました。

<2 日目>住友林業グループ関連施設

別子銅山記念館

別子銅山記念館は、別子銅山の意義を永く後世に伝えるために、住友グループの協力によって昭和 50



年に建設されました。建物は、別子銅山の守護神が祀られている大山積神社の参道脇にあり、鉱山の坑内をイメージした造りで半地下構造となっています。館内には別子銅山に関する貴重な史料や鉱石など約 300 点が展示され、屋外には標高 1,000m を超える険しい山を走っていた明治時代の蒸気機関車などが展示されています。

なお、「別子銅山記念館」は会員企業の（株）日建設計様が設計をされました。

1) 別子銅山の歴史

別子銅山は元禄 3 年（1690 年）に発見されました。住友が稼行請負願を出し、翌 4 年（1691）5 月に幕府より 5 年間の請負許可が出て、その年の 9 月に歓喜・歓東抗という場所で採掘を開始しました。元禄 15 年（1702）には永代稼行の許可が下り、開坑以来、昭和 48 年（1973）の閉山まで一貫して住友が経営しました。海拔 1,200m 位の地点から採掘を開始し海面下 1,000m 位まで、283 年の長きにわたり掘り続けられました。283 年間で掘った坑道の総延長は約 700km、産銅量は約 65 万 t になります。

2) 館内の見どころ

- ① 大鉛（おおぼく）：大鉛とは、毎年元旦に自然の恵みへの感謝、事業の発展、安全を祈願して、銅山の守護神大山積神社に奉獻していた鉱石で飾り藁で結束しています。昭和 48 年（1973）の元旦に奉獻された別子銅山最後の鉱石が展示されています。
- ② 泉屋コーナー：泉屋（住友の屋号）の歴史を絵図、古文書、図巻、器物、記念品などで紹介。住友家の初代当主である政友が書き記し、後に家訓となる「文殊院旨意書」が展示されており、住友事業精神の原点といわれています。
- ③ 歴史コーナー：開坑より閉山までの別子銅山経営の推移を、古文書、絵図、図録図表、模型、写真などで紹介。明治中期の別子銅山の模型があり、山の様子を表しています。
- ④ その他：地質・鉱床コーナー／生活・風俗コーナー／技術コーナー／四阪島コーナー

マイントピア別子

マイントピア別子は別子銅山の施設跡などを利用した観光施設です。昭和 5 年（1930）から閉山の昭和 48 年（1973）まで採鉱本部が置かれていた端出場（はでば）地区を開発した「端出場ゾーン」と、



大正 5 年（1916）から昭和 5 年（1930）まで採鉱本部が置かれていた東平（とうなる）地区を開発した「東平ゾーン」があります。

索道基地跡

東平と端出場を結ぶ索道（鉱石を運ぶロープウェイ）は鉱石運搬だけでなく、生活用品から郵便物、新聞まで運んでいた主要輸送機関でした。貯鉱庫・索道基地の重厚な花崗岩造りは「東洋のマチュピチュ」と呼ばれています。

広瀬歴史記念館

住友家の初代総理事、広瀬幸平は幕末・明治の動乱期に、政府による接収や住友の経営難による売却から別子銅山を守り、その開発の近代化を推進しました。また、日本の産業の育成にも力を注ぎ、国家の発展に貢献しました。広瀬幸平の足跡を通して新居浜の生い立ちと日本の近代産業の歩みを知ることが出来る施設、広瀬歴史記念館を見学しました。

